

# 浅田次郎氏 (作家・日本ペンクラブ会長)

## 日本が文化国家として認知されるかどうかの試金石

6月の院内集会で「私は今まで本を食べて生きてきた」と大変キザなことを言いましたが、これは実感なんです。若い頃、1000円しかカネがなくて本を買うか昼飯に使うかといったら、まちががなく本を選んだ。小説家志望の特別な人間だったからではなくて、本好きの人、知を求める人は、そういうものではないかと思います。なので今でも、本の刊行の際に値付けにはとてもこだわります。1600円の単行本ならば1500円にならないか、文庫本だったら500円でなく490円にならないかと出版社に無理を言うこともある。100円、10円の違いで、人生の決定的な一冊を買い逃したんじゃないか、という若い頃の恐怖感が蘇るからです。今は大人ですから、値段が少し高くても買いますが、若い人は価格で取捨選択するというのが現実です。読書をする人たちにとって、消費税率のアップは大きな影響があるのです。



私は小説を書くときにも、食べ物を作るような気持ちで書いています。いい小説は、美味しい、満腹感がある、そして栄養になるんです。さらに言うなら、安ければなおいい。安さは3つの基準とは違いますが、とても重要な本の要素だと思います。私は学歴がありませんが、ハンディキャップにもならなかったし、コンプレックスにもなっていません。読書が全てのことを教えてくれたからです。「学歴がない」と口に出して言えるのは、読書に対する感謝、本に対する感謝、活字に対する感謝があるからで、読書さえできれば人生は何とかなる。あらゆる職業に関して言えることだと思います。だからこそ、貧乏な若者に読書ができないというハンディキャップを与えてはならない。社会がそういう努力をしていかなければならない。

消費税に関して私は公平な税制だと思います。収入の多い人が多くの税を支払う。だからこそ、知の公平さというところまで踏み入って考えていただきたい。貧富に関わらず知を吸収するチャンス、若者に平等に与えていただきたい。そのためには、書物の値段、新聞の値段をちょっとでも安くするということが一番具体的な方法です。

たしかにネットは便利ですが、ネット化された教養は近視眼的だし、表層的でもある。かつての活字の時代は、近視眼的ではなくて巨視的に見ていたし、表層的ではなくて根本的に捉えていた。それが教養主義だと思う。明治維新を成功させたのは、寺子屋教育が行き届いていた結果としての識字率だった。明治時代の教育も、寺子屋教育以来の知的インフラを継承していた。それ故に、明治というものの成長があった。新渡戸稲造にしても森鷗外にしても、偉人たちは明治と

いう時代のもっている教養主義から誕生したのです。こういう歴史の中に私たちはいる。

今のネット化する社会で、簡単に教養主義を否定してよいものか、あるいは知らず知らずのうちに否定してしまうような社会になってよいものか。姜尚中さんも触れていますが、『西田幾多郎全集』が発売されたとき、哲学科の学生のみならず、学部学科専攻に関係なく、西田の全集を読まなければならないと考えた若者たちが、書店のまわりを取り囲み、幾晩も徹夜をして買ったんです。こういう日本の150年間の流れを考えると、8%とか10%という議論をしている理由がわからない。なぜ本に税金がかかるのか。明治以来の日本を支えてきたのは教養主義です。そういう伝統の中で文化を育ててきたという覚悟を、ネット社会の中であればこそ持っていなければいけない。活字文化推進、読書率向上のためにも税率は0%にすべきです。外国からみると日本の値打ちは経済面、科学技術面だけだと言われますが、そういう経済や科学技術も、長い教養主義があってこそ育まれたんです。いまここが、日本が文化国家として認知されるかの試金石だと思います。

消費税が10%になると、小説の単行本なら150~160円、文庫では50~100円の税金が上乘せされる。この金額を大人の感覚で考えないでほしい。アルバイト代をもって書店に行く学生、親から小遣いをもって本屋に行く子供もいるわけです。彼らにとって、その金額は大変なダメージになります、文化へのダメージになります。よく考えていただいて、いきなりは無理でも、将来はゼロを目指していただきたいと思います。